

華日辞典の原稿還る

旧同文書院の關係者に 中共の好意で

【豊橋発】終戦当時中国国民政府の手で接收された旧東亜同文書院大学の貴重な華日辞典原稿が、中華人民共和国の好意で元の關係者の手へ返そうという話が進められている。

元上海にあった東亜同文書院大学では、さる昭和五年から華日辞典の編纂を計画、鈴木沢郎教授（現愛知大学教授）ら十二氏の手で資料を集め、終戦直前までにカード約十四万語を集めて整理を終り、出版する準備を進めていた。

ところが終戦となり、このカードは他の同大学資産、図書三十万冊とともに同廿年十二月国民政府文教部に接收され、本間喜一同大学学長ら關係者はこれを大きな木箱五つに入れ、くれぐれも散逸しないようにと依頼して交通大学（元東亜同文書院大学）の二部屋に積み上げ、同二十一年三月日本に引揚げた。

その後八年、当時の關係者であった豊橋市愛知大学本間学長（旧東亜同文書院大学学長）小岩井浄、鈴木沢郎両教授らの間でこの辞典原稿を何とか返してもらい出版しようという話が出て、さる七月日中友好協合理事長内山完造氏を通じて中華人民共和国政務院科学委員長郭沫若氏および当時の国民政府側接收委員であった文学芸術工作者鄭振鐸氏あてに接收された関係辞典原稿を改正し、中日文化交流に寄与したいから返してほしいと手紙を出したところ、さる五日愛大本間学長あてに届いた内山完造氏の手紙に同封して康（恐らく文士范寿康氏か）という人から日本語で「あり場所を調べるために手間どったが保存されていると分ったから人民中国日本語版編集部あてに正式に申請するよう」と書いてあった。

この報らでカード類は中国内戦などで散逸しているのではないかと半ばあきらめていた本間学長は大喜び。早速さる七日内山完造氏を通じ書類を送った。愛大では今年中に到着するとみて同大学国際問題研究所で予算約三百万円て出版する計画をたて、近いうちに華日辞典編さん委員会を作り、同大学鈴木、桑島両教授のほか旧東亜同文書院教授だった大阪外国語大坂本教授、東北大野崎教授、一橋大熊野教授らにも参加を呼びかけることになった。

〔注〕朝日新聞 昭和二十八年一〇月一三日夕刊所載。文中の康とは康大川、范寿康は誤り。

華日辞典受取に使節を

協会代表 大達文相に会見

華日辞典の原稿カード十四万枚を中国から贈られること（既報）について友好協会では受入に慎重を期し討議を重ねた結果、丁重な礼をもって中国へ受取の使節を出すことが適当であると結論し、七月二十一日愛知大学本間学長、協会伊藤常任理事（現理事長）らは文部省に大達文部大臣を訪問、文化交流の立場から文部省の援助を希望し使節派遣の旅券発給について外務当局への助言を要請した。

これにたいし大達文相は「両国に国交のないときこうした問題をとりあげることがはむつかしいが、日中学問の交流の立場から考慮してみたい」と答えた。

その後協会常任理事会ではこの問題をつよく推進することとし、さしあたり中国への受取りの使節は伊藤理事長、能智理事、鈴木愛大教授と決定、旅券の手続をとる。

〔注〕 「日本と中国」一九五四年八月十一日所載。

“日本国民に贈る”

華日辞典　まず内山氏の手へ

興安丸に積込まれた「華日辞典」原本カードを受け取りに舞鶴に向った鈴木沢郎愛大教授は二十八日帰豊したが、同カードは“日本国民に贈る”とされ、屈先が日中友好協会代表内山完造氏としてあるので、いったん東京の内山氏のもとへ送られ、近日中にあらためて愛大へ渡される運びとなった。

〔注〕毎日新聞　昭和二九年八月三〇日所載。

中国へ 四千冊の本贈る

『日華辞典』の返礼にと

十二日舞鶴を出港、塘沽へ向う興安丸に、日中友好協会乗船代表嶋田政雄氏の荷物として、納豆研究で有名な宇都宮大学教授山崎百治農博の蔵書二十五箱（約四千冊）が積込まれることになった。これはさききに、中国科学院郭沫若委員長から、日中友好協会内山完造副会長あてに「終戦当時東亜同文書院で編サン中だった日華辞典の原本となるカード約三十万枚は、当方で保管している。これを愛知大学本間学長、鈴木教授らむかしの同文書院研究グループの手に返したい。送る方法を考えてくれ」という意味の連絡があり、同協会では今回釈放戦犯を引取りに行く興安丸の帰航に積込むこととして郭委員長の承認を得たもの。

同協会に最近入った電報によれば、カードはすでに天津に回送されているという。

なお山崎博士の蔵書は、日中友好協会からこの話をきいた山崎氏が、そのお礼として中国科学院に贈りたいと申し出て、こんど送られることになったもの。

〔注〕朝日新聞夕刊 昭和二十九年九月九日所載。

廿四日頃舞鶴へ 興安丸

旧軍人等いよいよ歸国

中国人民解放軍によって赦免された旧日本軍人四百十七名をふくむ在華同胞五百六十名の帰国をむかえるため三団体では着々と準備を整えている。

(中略)

乗船代表、島田政雄氏

日中友好協会常任連絡会議では一日、今次帰国船の乗船代表として本部常任理事・組織宣伝部長の島田政雄氏を中国へ派遣することに決定した。

華日辞典もこの船で

中国から贈られる旧東亜同文書院の華日辞典原稿カード十四万枚の受取使節として決定された友好協会理事長伊藤武雄氏、常任理事能智修弥氏は、今回の帰国船に便乗して中国を訪問できるよう、外務省、文部省などと折衝中である。

またこの機会に協会では、さきにおこなわれた日中友好七夕運動によって全国から集められた短冊約一万五千枚をはじめ、多くのおくり物を托する予定。

〔注〕 「日本と中国」日中友好協会機関紙一九五四年九月十一日所載。

終戦の年、上海の東亜同文書院では、一団の教授が黙々として華日辞典の原稿をカードにつくっていた。卅万語、それまで最大といわれた石山福治氏のものに何倍かの分量で、まさに画期的のものになる筈だった▼敵産として没収せられて八年、在留邦人問題でむこうへいった内山完造氏に頼み、郭沫若副総理にすらべてもらった結果ゆくえがわかった。こんど戦犯引揚船でもたらされるカードがそれである▼この仕事を立案し経費を出した東亜同文書院は消滅したが、仕事にあたった熊野一橋大、鈴木愛知大教授等は健在だから、今後これどう編集してゆくかについては、教授連に第一の発言権がある▼カードは一部紛失しているというし、また、湖南人が中共の天下をとったため、湖南の方言が通用し、そんな語をも入れねばならぬ。あたらしくやり直さなければならぬから、その経費が大変だ。どのようにして世界第一の中国語辞典として結実させるかが今後の問題だ▼出版者の多くがベスト・セラーをねらい、価値があるとわかっていても手を出さないのが日本だ。その実、出版社の名が永久にのこるのは、一時の流行書を出すからではなく、不朽の名著を出すことによるのである▼諸橋轍次博士の漢字大辞典、山崎総与氏の中国地名辞典、永尾龍造氏の中国風俗誌など、埋れた大著の列に華日辞典も入るかとおもうとまことに寒心にたえぬ▼やむを得ずんば、国立の編訳局案でも提唱しようか。

〔注〕産業経済新聞コラム「点心」昭和二十九年九月十三日附所載。